

## 接続助詞的ノヲとノガの接近に関する研究

著者	天野 みどり
雑誌名	大妻女子大学紀要. 文系
巻	51
ページ	174-165
発行年	2019-03-20
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1114/00006717/">http://id.nii.ac.jp/1114/00006717/</a>

# 接続助詞的ノヲとノガの接近に関する研究

天 野 みどり

【キーワード】 構文, 拡張, 自動詞構文, 他動詞構文, 接続助詞, 逸脱文

## 1. はじめに

実際の言語使用場面では、変化の途上にあると考えられるようなやや不自然な文がしばしば出現する。本研究では、積極的にこうした不自然さを伴う文を考察対象とし、現代日本語における構文の意味の拡張の問題を考察する。とりわけ、現代日本語の他動詞構文・自動詞構文の拡張を明らかにする一端として、今まさに拡張しつつある、やや不自然なノヲ・ノガの接続助詞的用法を考察する。

接続助詞的ノヲは格助詞のヲ、接続助詞的ノガは格助詞のガを淵源とすると考えられるが、接続助詞的ノヲ・ノガの文の実例の中には、もともとのヲ・ガの違いが希薄化し、よく似た意味を表すものがある。本研究では、まず、(1)類似した意味を表す接続助詞的ノヲ・ノガの文がどのような点で似ているのかを明確にする。

その上で、接続助詞的ノヲ・ノガの用法に関する、母語話者の許容度調査（自然さの度合いに関する内省判断調査）の結果に基づき、(2)ノヲ・ノガが類似した逆接的な意味を表しつつも、なお、派生元の他動詞構文・自動詞構文の意味を引き継いでいること、(3) 意味的に接近しているように見えるノヲ・ノガだが、ノヲの方がノガの意味に接近する拡張を起こしていることを明らかにする。本研究の考察を通し、許容度の異なりを考慮した現代語文法研究の重要性も主張したい。

## 2. 接続助詞的ノヲ・ノガ—違和感のある日本語文

まず、接続助詞化しつつあるノヲとは以下のようなものである。

- (1) 二人がそれを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手をふって、「いいんだよ、それは持ってお行き。こっちじゃ住所の控えはあるから」(「ちょ」(レーバンクー (1988) より)
- (2) というのも、その年、国民総動員ということで、ほんとうは五年制だった女学校を四年で卒業になり、おまけに入学が決まっていた東京の学校が三月の空襲で焼けて自宅待機ということだったのを、ちょうど家の近くに疎開して来た、療品省という海軍の医療品をあつかう部門で四月から働くことになっていたからだった。(「夏の」)

(1) (2)はいずれも実例である。しかし、人によってはいずれも不自然で許容しがたいと判定する

場合もあるだろう。

これらのノヲのヲが格助詞だとすると、その後続には他動詞述語句が現れるはずだが、(1)の後続には、さらに重複してヲ句「手を」と、「手を」と統語的に結びつく「ふって」が現れるのみであり、ノヲと統語的關係を結ぶ他動詞述語句が存在しない。同様に(2)も、ノヲの後続動詞は「働く」という自動詞であり、ノヲのヲが格助詞だとすると統語的關係を結ぶ他動詞が無いように見える。さらに、この場合のノヲを逆接の接続助詞のノニに換えて「写しとろうとするのに、じれったそうに手をふって」「自宅待機ということだったのに～働くことになっていた」としても、それぞれの文の意味は大きくは変わらないように感じられる。

以上の特徴をまとめると(3)のようになる。

(3) 一群のノヲの文に見られる逸脱的な特徴

- ① 許容度が低い(安定しない)。
- ② ノヲと統語的關係を結ぶ他動詞が見かけ上存在しない。
- ③ 逆接の接続助詞ノニと言い換えても大きく意味が変わらないように感じられる。

また、接続助詞的なノガとは以下のようなものである。

(4) 入院中は、毎日のように彼女が見舞ってくれた。(中略) それでも、心細さは消えなかった。都内の実家を離れ、一人暮らしを始めて3年目。ろくに実家に帰ることはなかったのが毎日、病院の公衆電話から家族の声を聞いた。(「患者」)

(5) どうにかして母親の愛情をつなぎとめるのが幼いときからの彼の最大の関心事だったのが、こうみなに死なれてみるとはりあいというものがまったくなくなったも同然である。(「トリ」)

(4)(5)も実例であるが、いずれも人により違和感があるとか不自然で許容しがたいなどと判断される場合もある例だろう。

(4)のノガのガが主格を表す格助詞だとすると、このノガ節は、後続の「聞いた」が語彙的に予測する主格(動作主)とは意味的に異なり、統語的な結びつきに違和感がある。また、(5)はノガの後続に重複してガが出現し「なくなった」と結びついているため、ノガと統語的に結びつき得る動詞が無いように見える。さらに、これらのノガをノニに換えて「実家に帰ることはなかったのに～家族の声を聞いた」「関心事だったのに～はりあいというものがまったくなくなった」としても、大きな意味の違いが無いように感じられる。

これらのノガ文の特徴は以下のようにまとめることができる。

(6) 一群のノガの文に見られる逸脱的な特徴

- ① 許容度が低い。
- ② ノガと統語的關係を結ぶ自動詞が見かけ上存在しない。
- ③ 逆接の接続助詞ノニと言い換えても大きく意味が変わらないように感じられる。

こうしたノヲ・ノガは寺村(1982)・レーバンクー(1988)・黒田(1999)などにより格助詞ヲ・ガから逆接の接続助詞的ノヲ・ノガへの拡張と考えられてきた。さらに、天野(2011)では、より具体的に、接続助詞的ノヲの文は逸脱性の無い方向性制御他動詞構文(例えば「太郎は次郎がやる

うとするのを遮った』)からの拡張, 天野(2014)では, 接続助詞的なノガの文は逸脱性の無いサマ主格変遷自動詞構文(例えば「太郎は昨年補欠だったのが今年はレギュラーになった」)からの拡張とし, 前者には方向を〈サエギル〉意味(=対抗動作性), 後者にはある状態が異なる状態に〈ナル〉意味(=変遷性)が認められることが述べられている。つまり, 天野(2011)(2014)は, 接続助詞的なノヲ・ノガの文は, それぞれ他動詞構文・自動詞構文の意味を引き継いだ, 拡張文だと述べているわけである。この拡張を図1にまとめておく。

S1~する(動作)	ノヲ	S2~する	=接続助詞的なノヲ文 (他動詞的な、意図的行為性あり)
~ヲ	↑	サエギル	
S1~である(状態)	ノガ	S2~なる	=接続助詞的なノガ文 (自動詞的な、状態変遷性あり)
~ガ	↑	ナル	

図1 逸脱的なノヲ文・ノガ文①

図1の上段が接続助詞的なノヲ文, 下段が接続助詞的なノガ文の拡張を示している。接続助詞的なノヲ・ノガの文では, ノヲ節・ノガ節述語の主語と, 後続述語の主語が異なる場合も多い。そこで, 図1では, 前者の主語をS1, 後者の主語をS2と表示している。このノヲ・ノガの伴う節をノヲ節・ノガ節, [S2~する]・[S2~なる]をそれらと区別するために主節と呼ぶことにすると, 図1が示すように, 接続助詞的なノヲ文は主節述語に〈対抗動作性〉という他動詞的な意図的行為性があり, 接続助詞的なノガ文は主節述語句に〈変遷性〉という自動詞的な状態変遷性が引き継がれていると天野(2011)(2014)はみなしているわけである。

### 3. ノヲ・ノガ類似タイプー〈継起的対比〉

#### 3.1 〈継起的対比〉のノヲ文とは

他方, 申(2017)は, 天野(2011)が逸脱的な特徴を持つノヲの文を一括して他動詞構文の意味を引き継ぐものとしたのに対し, 逸脱的な特徴を持つノヲ文がさらに拡張段階の異なる用法に細分できることを述べている。申(2017)の提案を簡略に整理するならば, 逸脱的な特徴を持つノヲの文の第1の用法として, 他動詞構文的な意味〈サエギル〉の認められる用法, 第2の用法として, 〈ナル〉の意味を持つ用法〈継起的対比〉, 第3の用法として, 単なる対比の用法〈同時的対比〉に分けたと言える。本研究ではこのうち第2の用法〈継起的対比〉を, 母語話者に対する許容度調査の結果を考慮しつつ考察していく。

申(2017)の挙げる第2の用法〈継起的対比〉とは, 主節述語句としてナル・~コトニナル・~ヨウニナルなどのナル系述語句が用いられる以下のようなものである。

(7) …いわば, 最初は典子が主体であったのを, いつのまにか竜夫と逆の位置になった。

(レーバンクー(1988)より申(2017)(23)p.80)

(8) これまでロシア経由であったのを, 今回の旅では初めてウイーンを経由(往途, 帰途とも宿泊)することになった。

(申(2017)(13)p.77)

(9) 以前は出来あがりをAMGに持って行って改造してたのを, 製造途中にAMGが手をつけ

- ることかなーり AMG チューンの価格が安くなったのです。 (申 (2017) (17) p.78)
- (10) というのも、その年、国民総動員ということで、ほんとうは五年制だった女学校を四年で卒業になり、おまけに入学が決まっていた東京の学校が三月の空襲で焼けて自宅待機ということだったのを、ちょうど家の近くに疎開して来た、療品省という海軍の医療品をあつかう部門で四月から働くことになっていたからだった。 (天野 (2011) より、申 (2017) (18) p.78)
- (11) これはもと小紐の結びが左腰にあつたのを、後に正面に結ぶようになってきたために、別に忘緒といふものを作つて垂れたので形式主義に囚はれたことであつた。 (申 (2017) (16) p.78)
- (12) はじめは幼児が単に明るい空を望んで口にした言葉だったのを、父母や祖父母と一緒に口ずさんでいるうち、いつか、生活責任者・保育者としての心情も移し込めるようになったのだと思うのです。 (申 (2017) (20) p.78)

これらを申 (2017) は〈ノヲ節事態〉から〈主節事態〉へと2つの事態が継起することを表すものとし、〈継起的対比〉と呼んでいる。以上の例の主節述語句「(～ことに／～ように) なった」を構成するナルは自動詞であり、直接的にノ格と結びつく動詞ではない。申 (2017) はこの特徴に注目し、(1)のような主節述語句に他動詞を持つ文よりも他動性が希薄になっていると考えたものと思われる。

これらを観察すると、申 (2017) の言う〈継起的対比〉のノヲ文は、天野 (2014) が考察した〈変遷性〉の意味を持つ接続助詞的なノガの文に類似しているように見える。天野 (2014) は、100例の実例調査の結果、接続助詞的なノガの文は(13)のような特徴を持つものが多いことを明らかにしている。

### (13) 接続助詞的なノガの文の特徴

- ① 主節述語が「なる」などの状態変化自動詞である。
- ② 変化後の状態を表す句が共起する。
- ③ ノガ節述語句が「～た・ていた」形や「～はずだ・つもりだ」形で、ある時に確定された様態や、確定された予定の様態が表される。
- ④ 2時点の推移を表す時間的要素が共起したり、推移する条件や契機を表す要素が共起する。

例えば、接続助詞的なノガ文(14)は、下線部に(13)の特徴が見受けられる。

- (14) 私はそういう人たちが病院を毛嫌いするのを何度か見聞きして、子供じゃあるまいしと、はじめは滑稽にさえ感じたのが、ながくイタリアで暮らすうちに、だんだんとその背後にある社会的な事情がのみこめるようになった。(「地図」)

(14)は逸脱的な特徴を持つノガ文だが、①主節述語句が「なる」であり、②変化後の状態を表す「～事情がのみ込めるように」という句が共起し、③ノガ節述語句が「感じた」という「～た」形で、ある時に確定された事態を表し、④「はじめは～」「だんだんと」のように2時点の推移を表す時間的要素が共起している。こうした特徴を持つことから、このノガ文がある確定された状態が異なる状態に変わる〈変遷性〉の意味を表していることがよくわかる。

他方、申 (2017) の挙げる〈継起的対比〉のノヲの例文も、(13)のノガの特徴を共有する。

(8) これまでロシア経由であったのを, 今回の旅では初めてウイーンを経由 (往途、帰途とも宿泊) することになった。

(8)は①主節述語句が「なる」であり、②変化後の状態を表す「～経由することに」が共起し、③ノヲ節述語句が「あった」という「～た」形で、ある時に確定された事態を表し、④「これまで」「今回の旅では」のように2時点の推移を表す時間的要素が共起している。これらの特徴からすると、申(2017)の〈継起的対比〉のノヲ文は、〈変遷性〉の意味を表す自動詞構文と意味的に類似しているように見える。

これを図2にまとめ、既述の図1と並べて以下に掲載する。問題は図1の下段のノガ文の〈状態変遷性〉と図2のノヲ文の〈継起的対比〉の類似と異なりである。図2に?を付して示したが、このノヲ文にはもはや他動性は無いのだろうか。

S1～する (動作)	ノヲ	S2～する	=接続助詞的なノヲ文 (他動詞的な、意図的行為性あり)
～ヲ	↑	サエギル	
S1～である (状態)	ノガ	S2～なる	=接続助詞的なノガ文 (自動詞的な、状態変遷性あり)
～ガ	↑	ナル	

図1 逸脱的なノヲ文・ノガ文①(再掲)

主節述語にナル系述語をもつ、〈継起的対比〉のノヲ文			
S1～する	ノヲ	S2～なる	(他動性なし?)

図2 逸脱的なノヲ文②

### 3.2 「意図的行為動詞」の従属節の有無に関する許容度の異なり

本節では、ノヲ文の〈継起的対比〉タイプが申(2017)の言うように他動詞構文の意味をさらに希薄化させているとするならば、どのようになるのかということを考えてみたい。〈継起的対比〉のノヲ文は、もはや他動性が無くなり、自動詞構文からの拡張と考えられる接続助詞的なノガの文とほぼ同じ意味を表すと位置づけてよいようなものなのだろうか。

申(2017)も言っていることだが、申(2017)の挙げる〈継起的対比〉のノヲ文の例では、主節述語句に従属する副詞節や連体節の構成要素として「経由する・つける・働く・結ぶ・口ずさむ」という、意図的行為動詞が用いられるものが多く、この特徴を欠くのは(7)のみである。つまり、(8)～(12)の形式は [[～ノヲ]+[～意図的行為動詞の副詞節・連体節]+[～ナル]] と表すことができるものなのである。(8)を例にしてその構成を簡単に示せば [[～ロシア経由であったのを]+[～意図的行為動詞「経由する」の連体節コト]+[～なった]] という構成である。

このタイプのノヲは、主節述語句 [～ナル] と統語的關係を結ぶのではなく、副詞節や連体節を構成する意図的行為動詞述語句と他動關係を結び成立しているものとも考えられる。だとすれば、このノヲは格助詞性があるということになる。

そこで、本研究では、(8)～(12)について、主節のナル系述語は残したまま、副詞節・連体節に現れる意図的行為動詞を名詞に換え動作性を弱めた文 ((8')～(12')) を作例し、許容度の変化を調査した

(許容度調査①)。調査概要は以下の通りである。

#### 許容度調査①

- ・実施時期：2018年4月
- ・調査協力者：日本語母語話者（東京の大学生）第一種調査67人・第二種調査70人。（判定例文が多いため均等に第一種・第二種に分割した。）
- ・調査内容：例文についての許容度を三段階（○＝自然であり問題無く許容できる・△＝やや不自然さを感じるが許容できる・×＝不自然で全く許容できない）で判定。
- ・調査結果表示：○＝2点，△＝1点，×＝0点に換算し，便宜的にその平均値を表示（小数点第三位以下を四捨五入）。

その結果，以下のように，意図的行為動詞を名詞化するなどの操作で無くしてしまうと，全て許容度は下がった（以下，例文番号の後に許容度調査の結果として換算点の平均値を示す。2点に近いほど許容度が高く，0点に近いほど許容度が低いことを表す）。

- (8) (1.36) これまでロシア経由であったのを，今回の旅では初めてウイーンを経由することになった。
- (8)' (0.84) これまでロシア経由であったのを，今回の旅では初めてウイーン経由になった。
- (9) (1.72) 以前は出来あがり AMG に持って行って改造してたのを，製造途中に AMG が手をつけることでかなーり AMG チューンの価格が安くなったのです。
- (9)' (0.78) 以前は出来あがり AMG に持って行って改造してたのを，製造途中での AMG の関与で，かなーり AMG チューンの価格が安くなったのです。
- (10) (0.63) ほんとは五年制だった女学校を四年で卒業になり，おまけに入学が決まっていた東京の学校が三月の空襲で焼けて自宅待機ということだったのを，ちょうど家の近くに疎開して来た、療品省という海軍の医療品をあつかう部門で四月から働くことになっていたからだった。
- (10)' (0.41) ほんとは五年制だった女学校を四年で卒業になり，おまけに入学が決まっていた東京の学校が三月の空襲で焼けて自宅待機ということだったのを，ちょうど家の近くに疎開して来た、療品省という海軍の医療品をあつかう部門での四月からの勤務になっていたからだった。
- (11) (1.75) これはもと小紐の結びが左腰にあつたのを，後に正面に結ぶようになったために，別に忘緒といふものを作つて垂れたので形式主義に囚はれたことであつた。
- (11)' (0.84) これはもと小紐の結びが左腰にあつたのを，後に正面になったために，別に忘緒といふものを作つて垂れたので形式主義に囚はれたことであつた。
- (12) (1.45) はじめは幼児が単に明るい空を望んで口にした言葉だったのを，父母や祖父母が一緒に口ずさんでいるうち，いつか，生活責任者・保育者としての心情も移し込めるようになったのだと思うのです。
- (12)' (0.94) はじめは幼児が単に明るい空を望んで口にした言葉だったのを，父母や祖父母の口ずさみで，いつか，生活責任者・保育者としての心情の言葉になったのだと思うのです。

例えば(8)の「ウイーンを経由する」を(8)'の「ウイーン経由」のように名詞化した場合，(8)は

1.36 であった許容度点数が、(8)' では 0.84 と下がっている。同様に(9)~(12)のいずれも、[[~ノヲ]+[~意図的行為動詞の副詞節・連体節]+[~ナル]] 形式の文の方が、意図的行為動詞を名詞に換えた [[~ノヲ]+[~ナル]] 形式の文 ((9)' ~ (12)') よりも許容度が高いという結果になっている。

このことから、(8)~(12)のノヲ文では、主節に現れる非意図的なナル系述語をノヲの統語的關係先とするのではなく、その主節述語に従属する副詞節・連体節に現れる意図的行為動詞述語を他動關係先として結びついていること、すなわち、他動構造を保持することにより、文の成立を果たしているということが明らかである。恐らく、(8)' ~ (12)' では、名詞的な言語要素、「ウイーン経由」などから、〈ウイーンを経由する〉などの意図的行為性の意味を創造的に解釈しなければならず、言語理解に負担がかかっている。その分、そうした意図的行為性が明示的な(8)~(12)に比べ、許容度が下がるものと思われる。

ただし、(7)のように副詞節や連体節にも意図的行為動詞が全く出現しない [[~ノヲ]+[~ナル]] 形式の実例があることには留意しなければならない。

- (7) (0.37) ... いわば、最初は典子が主体であったのを、いつのまにか竜夫と逆の位置になった。  
(レーバンクー (1988) より、申 (2017) (23) p. 80)

この実例は、ノヲ文の拡張の可能性を示唆する重要な例である。この例は、ノヲの後続に、ノヲと他動關係を結ぶような意図的動作性を創造的に解釈するための、言語的な手がかりが何も無いのである。この点から、この実例は接続助詞的なノガの文にさらに類似するものと位置づけられる。

しかし、この(7)についても許容度調査を行ったが、結果は 0.37 ときわめて低いものであった。副詞節や連体節に意図的行為動詞をもつ(8)~(12)と比べても、この(7)の許容度が一段と低いことから、やはり、〈継起的対比〉タイプのノヲ文を成立させるには、意図的行為動詞の出現が必要とされると言ってよいことがわかる。

### 3.3 〈継起的対比〉のノヲ文とノガ文との異なり

次に、ノガ文との違いを見るために、(8)~(12)の意図的行為動詞を名詞に換えた文 ((8)'' ~ (12)'') のノヲを、ノガにした、[[~ノガ]+[~ナル]] 形式の文 ((8)'' ~ (12)'') に関する許容度調査②を行った(実施日時・協力者等は許容度調査①と同じ)。その結果、ノヲ文とは異なり、ノガ文の場合には意図的行為動詞を名詞に換えても許容度が下がることはなかった。

- (8)'' (1.76) これまでロシア経由であったのが、今回の旅では初めてウイーン経由になった。  
 (9)'' (1.51) 以前は出来あがり AMG を持って行って改造してたのが、製造途中での AMG の関与で、かなーり AMG チューンの価格が安くなったのです。  
 (10)'' (1.51) ほんとうは五年制だった女学校を四年で卒業になり、おまけに入学が決まっていた東京の学校が三月の空襲で焼けて自宅待機ということだったのが、ちょうど家の近くに疎開して来た、療品省という海軍の医療品をあつかう部門での四月からの勤務になっていたからだった。  
 (11)'' (1.76) これはもと小紐の結びが左腰にあつたのが、後に正面になつたために、別に忘緒といふものを作つて垂れたので形式主義に囚はれたことであつた。  
 (12)'' (1.58) はじめは幼児が単に明るい空を望んで口にした言葉だったのが、父母や祖父母の口ずさみで、いつか、生活責任者・保育者としての心情の言葉になったのだと思うのです。

(9)''～(12)''の許容点数は1.51～1.76と安定して高い。これらは、主節述語ナルの前に意図的行為動詞が無くても、ノガ文の場合には〔～ノガ～ナル〕という形式の自動詞構文として、自然に受け止められるということである。

申(2017)が〈継起的対比〉のノヲ文として示した(8)～(12)は、ナル系述語句を持ち(13)で示した特徴を共有するため、この(8)''～(12)''のノガ文と類似しているように見えたわけだが、両者は、ナルの前に意図的行為動詞の出現が必要かどうかで異なっている。

許容度調査①②の結果から、逸脱的なノヲは、ナル系述語と直接格関係を結ぶのではなく、副詞節や連体節に存在する意図的行為動詞との間に他動的関係を結び、ノヲ節事態を変更するような力を与える意図的行為の結果、異なる事態になることを表すのに対し、逸脱的なノガは、ナル系述語と直接格関係を結び、ノガ節事態が主節事態のように変わることを表すことが明らかとなった。

つまり、ある事態から異なる事態への継起的な変化を表す点は同じでも、逸脱的なノヲはヲ格の意味を、逸脱的なノガはガ格の意味を継承し、相互に異なる意味を表すということである。

#### 4. ノヲ・ノガの拡張の整理

以上の結果から、天野(2011)(2014)で考察した拡張に申(2017)のノヲ文の〈継起的対比〉用法を加え、ノヲ・ノガの拡張を整理すると以下の(15)のようになるだろう。

##### (15) ノヲ・ノガの拡張

第一段階：規範的な格関係ではない結びつきに踏み出した拡張。他動詞／自動詞構文の意味が、推論的に解釈される段階。

- ・ノヲの主節述語として、ノヲと直接関係しない意図的行為動詞が用いられる段階(例(1))  
＝他動詞構文(方向性制御構文)の鋳型によって、顕現している意図的行為動詞の意味に〈サエギル〉といった〈対抗動作性〉の意味が重ねられる。
- ・ノガの主節述語として、変化自動詞でない動詞が用いられたり(例(3))、第2のガが出現したり(例(4))する段階  
＝自動詞構文(サマ主格変遷構文)の鋳型によって〈変遷性〉の意味が重ねられる。

第二段階：ノヲの主節述語にナル系述語句、従属節述語に意図的行為動詞が用いられる段階(例(2)、(8)～(12))(継起的対比)。

第三段階：ノヲの主節述語句にナル系述語句が用いられる段階(意図的行為動詞が出現しない段階)(例(7))(継起的対比)

本研究の考察の中心であった第二段階のノヲ文は、サマ主格変遷構文のノガ文と同様の特徴が見られ、意味的にノヲ節事態から主節事態への変遷を表す点で類似している。しかし、変遷の継起となる意図的行為の意味が必要な点で、ノガ文と異なる。

さらに、ノヲ文の中にはこの変遷の継起となる意図的行為を表す動詞が現れず、ノガ文との違いが消失した実例(7)もある。(15)ではこれを第三段階とした。しかし、これは許容度が著しく低く、定着度はかなり低いものであった。

以上を図3にまとめる。点線の囲みが両者の接近を示す。

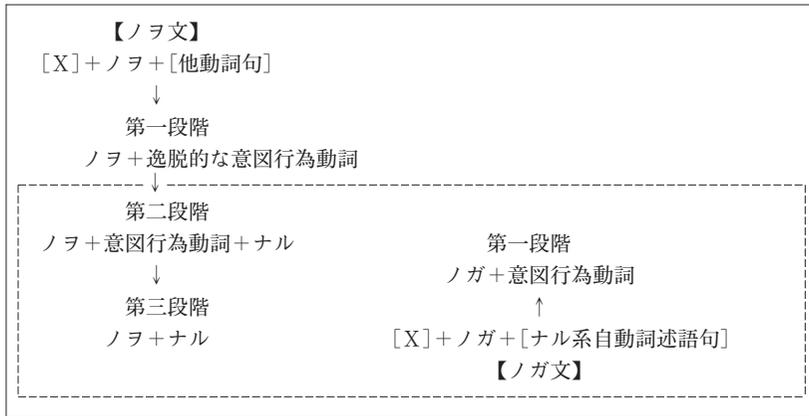


図3 継起的対比のノヲ文と、サマ主格変遷構文のノガ文の接近

## 5. おわりに

本研究では、許容度調査に基づいて、変化しつつある現象の意味や機能を考察した。その結果、ノヲ・ノガは類似した意味を表す拡張も見られるが、この場合のノヲの許容度は意図的行為性が無ければノガに比べて低いことがわかった。許容度が低いということは、慣習化・固定化がされておらず、派生元の他動詞構文・自動詞構文の基準の意味に照らした臨時的な補充措置、言わば規範からの逸脱を補正する解釈的営みが過度になされていることを示す。

では、不自然ながらも、このように両者が類似した意味を表すようになるさらなる拡張が、なぜノヲの側に生じているのだろうか。本研究では、その理由まで明らかにすることができなかったが、現時点で仮説的に考えていることは以下の2点である。

- (1) 「ノヲ」「ノガ」という形の類似から、もともとノガ文にあるサマ主格変遷構文の意味に「ノヲ」が牽引された可能性
- (2) ノヲ文の持つ他動性の意味としてもともと存在する支配関係（ノヲ節と主節との非対称性）は残しつつも、他動性の希薄化が進むと、非対称性のある対比的意味として〈継起的対比〉にたどりつく可能性

(1)は、形の似たノガ文がノヲ文の拡張に影響を与えたということであり、(2)は、ノガ文と関わりなく生じたノヲ文の他動性の希薄化の結果が、たまたまノガ文と類似したということである。(1)のように考えるならば、さらになぜノガが牽引したかを明らかにしなければならない。(2)のように考えるならば、非対称性のある対比的意味とは何かを詳述しなければならない。今後、他の拡張現象も視野に入れ、検証すべき問題である。

本研究では考察に際し許容度調査の結果を用いた。このように言語使用者の言語直観を頼りにした文の自然さ・許容度の違いを考察の根拠資料として取り入れたのは、実例として有るか無いかのみを根拠資料とするのでは見えにくい、構文の拡張の程度さ、すなわち逸脱の大きさや拡張の進み具合を理解することが可能となるからである。構文の拡張用法が、基準となる構文からどの程度離れ、どの程度非慣習的かは、許容度の違いに現れる。許容度が低いということは、基準となる構文からの逸脱の度合いが高く、基準の意味をベースとした類推にかかるコスト（＝創造的に解釈するのにかかる努力量）が高いということなのである。

また、条件の制御された例文間の許容度の違いを見ることにより、言語的条件の異なりによって意味理解のしやすさに差があることも明らかとなり、逸脱文の基準となる構文がどのようなものであるかも明らかになる。

言語直観は、主観が混じる恐れがあるとして回避される向きもあるが、より洗練されたものをめざし精密な調査を心がければ、動的な言語使用に見られる様々な課題を解くことに貢献する重要な手法だと思われる。

付記

本研究は2018年8月22日に開催されたCAJLE2018年次大会（カナダ・ヒューロン大学）において口頭発表した内容を修正・加筆したものである。会場でコメントをくださった方々にお礼申し上げる。

本研究は、平成28年度～31年度科学研究費基盤研究(C)「現代日本語の自他に関する構文的研究」（課題番号：16K02735 研究代表者：天野みどり）の成果の一部である。

#### 参考文献

- 天野みどり（2010）「現代語の接続助詞的なヲの文について — 推論による拡張他動性の解釈 —」『日本語文法』10:2, pp.76-92
- 天野みどり（2011）『日本語構文の意味と類推拡張』笠間書院
- 天野みどり（2014）「接続助詞的な「のが」の節の文」『日本語複文構文の研究』ひつじ書房 pp.25-54
- 天野みどり（2015a）「格助詞から接続助詞への拡張について — 「が」「のが」「それが」 —」『文章・談話研究と日本語教育の接点』くろしお出版 pp.99-118
- 天野みどり（2015b）「逸脱文の意味と推論」『日本語語用論フォーラム1』ひつじ書房 pp.101-121
- 天野みどり（2016a）「母語話者と非母語話者の逸脱文の意味解釈」『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版 pp.127-144
- 天野みどり（2016b）「逸脱的「それが」文の意味解釈」『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ』開拓社 pp.320-342
- 黒田成幸（1999）「主部内在関係節」（改訂版）『ことばの核と周縁 — 日本語と英語の間』くろしお出版 pp.27-103
- 申義植（2017）「複合助詞ノヲにおける格助詞用法と接続助詞用法の連続性について」『日本語文法』17:1, くろしお出版 pp.71-87
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版
- レーバンクー（1988）『「の」による文埋め込みの構造と表現の機能』くろしお出版

#### 例文出典

「ちょ」=日本推理作家協会「ちょっと殺人を」（レーバンクー（1988）より）／「夏の」=須賀敦子「夏のおわり」『ヴェネツィアの宿』1993／「患者」=『朝日新聞』「患者を生きる」2011.7.13／「トリ」=須賀敦子「トリエステの坂道」『トリエステの坂道』1995／「地図」=須賀敦子「地図のない道」『トリエステの坂道』1995